

## 少年サッカーにおける楽しさの構造と性格特性に関する研究

A study of the structure of enjoyment in junior soccer and personality

内田 博 昭\*                      西 田      保\*\*                      高 橋 結 香\*\*\*

Hiroaki UCHIDA\*                      Tamotsu NISHIDA\*\*                      Yuka TAKAHASHI\*\*\*

The purpose of the present study was to specify the structure of enjoyment in junior soccer, and to investigate the relationship between the enjoyment and personality.

A questionnaire consisting of 30 items regarding enjoyment in junior soccer along with the Five Factor Personality Inventory for Children (FFPC) were administered to 273 junior soccer players. In the first questionnaire, the subjects were asked to evaluate statements using a four-point rating scale and in the second, using a three-point rating scale.

The results were processed according to factor analysis, correlation analysis, and analysis of variance. For extracting the factors, a principal factor solution with normal varimax rotation was applied to the 30×30 correlation matrix.

The main findings were as follows:

1. Five factors were extracted and named respectively: activeness, admiration, achievement, progression, and teamwork. It seemed that activeness, achievement, and progression were the core factors for enjoyment in junior soccer, whilst admiration and teamwork were peripheral factors.
2. There was a positive correlation between the enjoyment of junior soccer and cooperative and conformist personalities, while on the other hand, there was a negative correlation between the enjoyment of junior soccer and an emotional personality.

### 緒 言

今日、学校教育現場では、いじめ、不登校、学級崩壊など対人関係の希薄化が一つの要因となる様々な問題が起こっている。これらの背景には、現代都市生活の発達、核家族化・少子化社会の到来に伴い、子ども社会において、いわゆる「遊びの3間」と言われる「時間・空間・仲間」が極端に減少してしまったことが考えられる。

そのような社会的背景の中で、1993年Jリーグが発足し、日本の子どもたちの中でサッカーが人気スポーツとなり今日に至っている。サッカーは、集団規範の下、共通目標に向かってメンバーが相互交流を図りな

がら活動するという集団的スポーツとしての特徴があり、今日の子どもの社会において良好な人間関係を築き深める手だてとしてその効果が期待できるものと考えられる。

そこで、少年サッカーのやる気・継続意欲を根底で支える少年サッカーの楽しさに関する先行研究をレビューしてみると、豊田(1994)は、子どもが考えるサッカーの魅力場面として、①子どもの思い切り動きたがる「活動性動機」や退屈から逃れ刺激を求めたがる「感性動機」が満たされる場面、②自己決定力と有能さの認知に大きく関係する技能である「シュート場面」、③子どもの好奇心を旺盛にし、友達と協力し他よりも良い結果をあげるべく競争を繰り返そうとする

\* ファミリスポーツクラブ

\*\* 名古屋大学総合保健体育科学センター

\*\*\* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

\* Family Sports Club

\*\* Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University

\*\*\* Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

「作戦場面」、④全員が一丸となって、一つの事に立ち向かうことによって自己決定や有能さの認知を高めるのと同時に、親和・承認動機など社会的動機を満足させる「共同作業場面」の4つの視点で考えている。また、サッカーとは異なるが、集団的スポーツとして分類されるバレーボールの楽しさを研究した西原・千駄（1985）は、中学生において、「工夫」「達成」「挑戦」「承認」「成果」の5因子を抽出している。その他、運動・スポーツの楽しさに関連する研究では、和田（1988）は、スポーツをする楽しさとして、①交友、②自己鍛錬、③解放性、④挑戦、⑤活動、⑥活動条件、⑦技能習得、⑧勝利感、⑨主体性、⑩自己表現、⑪遊戯性、⑫体力向上、⑬戦術、⑭ルール・マナー、⑮ファッションの15因子を抽出している。さらに、体育の楽しさに関する研究では、徳永・橋本（1980）は、体育授業における運動の楽しさとして、小学生において、①挑戦、②勝利感、③創造的活動、④賞賛、⑤健康、⑥競争、⑦集団活動、⑧観戦・応援、⑨スリル感、⑩自己実現の10因子をあげている。また、賀川（1982）は、友人や指導者、施設用具といった環境要素、指導方法に関するものも含めた体育授業の楽しさとして、小学生から高校生までを対象に、①できばえ・成果、②挑戦・熱中、③くつろぎ、④成功感、⑤応援・観戦、⑥賞賛、⑦非競争性、⑧脚光、⑨優越感の9因子を抽出している。以上のような知見は、運動・スポーツの楽しさ全般についての研究であり、それらの楽しさを規定する要因が極めて多様であることを示唆している。

また、賀川（1994）、岡澤（1994）、杉原（1994）、米川（1994）は、運動の楽しさの構造は、中核に内発的な楽しさがあり、その周辺に外発的な楽しさがあるのではないかということを示唆している。運動の内発的な楽しさとは、その運動でしか得られない楽しさであり、他の活動では代えられない楽しさである。また、運動の外発的な楽しさとは、他の運動でも、また運動以外の行動でも得られる楽しさである。

しかしながら、従来の研究においては、各スポーツ種目における楽しさ、特に少年サッカーにおける楽しさについては十分な研究がなされていない。

そこで、本研究では、少年サッカーにおける楽しさの構造について因子分析を用いて検討することを目的とした。また、楽しさという快感情は、主観的なものであり、その感じ方や楽しさを感じる対象には個人差がみられる。例えば、外向的で自己顕示欲の強い子どもは、自分がシュートを決めるということに強く楽しさを感じるが、内向的で不安傾向の強い子どもは、自分がシュートを決めて目立つことよりも、他者にうま

くアシストして得点に結びつくことに楽しさを感じる事が予想される。そこで、子どもたちの性格特性を調べ、それらがどのような種類のサッカーの楽しさと関連しているのかを検討することもあわせて目的とした。さらに、少年サッカーの楽しさに関する付加的な分析として、サッカー好感度、練習回数、競技レベルによる楽しさの特徴を把握することにした。

## 方 法

### 1. 調査対象者

予備調査としては、愛知県の少年サッカークラブ4チームの小学校5年・6年生（男子43名）および少年サッカー指導者（男性10名、年齢21歳から45歳）を対象とした。本調査としては、愛知県・岐阜県の少年サッカークラブ24チームの男子273名（5年136名、6年137名）を対象とした。

### 2. 調査時期

予備調査は、平成15年5月に実施された。本調査は、同年6月から8月にかけて実施された。

### 3. 調査内容

予備調査としては、児童には「あなたは、サッカーの練習や試合の中で、どんなときに楽しいと感じますか?」という質問、指導者には「子どもたちは、サッカーの練習や試合の中で、どんなときに楽しさを感じると感じますか?」という質問により、子ども側からと指導者側からのサッカーの楽しさについての自由記述を行った。

その結果、達成に伴う楽しさ、挑戦に伴う楽しさ、承認に伴う楽しさ、指導者に伴う楽しさ、仲間に伴う楽しさなどの内容にまとめることができた。これらの中で、指導者に伴う楽しさは、子どもからみた楽しさであり、それ以外の楽しさは、指導者および子どもからみた楽しさであった。

本調査としては、予備調査で行われた自由記述の結果と徳永・橋本（1980）、賀川（1982）、西原・千駄（1985）、豊田（1994）のこれまでの先行研究をもとに、サッカーの技ができることの楽しさである「達成」、難しい技への挑戦に伴う楽しさである「挑戦・能力向上」、上手くできたときに人から認められることに伴う楽しさである「承認」、チームとして一体感が感じられることに伴う楽しさである「仲間」、思い切り身体を動かすことができる楽しさである「活動欲求」などの観点から質問項目を検討した。そして、合計30項目の少年サッカーの楽しさに関する質問紙を作

成した。各項目の応答は、「ほとんど楽しくない（1点）」「あまり楽しくない（2点）」「すこし楽しい（3点）」「とても楽しい（4点）」の4段階評定であった。

また、対象者の性格を測定するために、曾我(1999)により作成された「小学生用5因子性格検査」を用いた。その検査は、5つの因子で構成されており、合計40項目からなっている。各項目の応答は、「はい（3点）」「わからない（2点）」「いいえ（1点）」の3段階評定であり、5つの性格特性は、以下の通りである。

- 協調性：人間関係を重視する。他人の気持ちを思いやり、共感や信頼を強く感じる傾向。
- 統制性：ある一定の価値基準に従って自己を統制する。責任感が強く、物事に積極的に取り組もうとする傾向。
- 情緒性：ストレスや脅威、あるいは他人の思惑に対して敏感で、緊張や不安が強い。何事にも自信がなく、落ち込みやすい傾向。
- 開放性：現実にとらわれることなく、発想がユニークで、好奇心や探究心が強い。常識の枠から開放された自由な思考を行う一方、現実回避の傾向も示す。
- 外向性：活動的で自己顕示傾向が強い。怒りなど

の感情を抑えるのが苦手で、外に表しやすい傾向。

#### 4. 調査方法

各少年サッカーチームの監督・コーチの協力を得た上で、練習会場または練習試合会場に向向して楽しさに関する質問紙および性格検査を個人へ直接配布し、その場で実施した。回答時間は約15分であった。

#### 結果および考察

##### 1. 少年サッカーの楽しさの因子構造

少年サッカーの楽しさの構造を把握するために、主因子解による因子分析を実施した。さらに、ノーマル・バリマックス法による直交回転を施し、回転後の因子負荷行列を示した（表1）。その結果、固有値1.0以上の基準で7因子が抽出された。因子の解釈にあたっては、因子負荷量0.40以上の項目を中心に行った。

第1因子に高い負荷量を示した項目は、「広いグラウンドを思い切り走り回れるとき (.741)」「サッカーで思い切り身体を動かしているとき (.722)」「汗をかきながらボールを追いかけしているとき (.711)」である。

表1 少年サッカーの楽しさ尺度の因子負荷行列

No.	質 問 項 目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7	共通性
7	「もっとうまくなってやろう!」と思うとき	<u>0.546</u>	0.316	0.386	0.060	-0.036	-0.054	0.034	0.557
17	上手な人たちに追いつこうと思って練習するとき	<u>0.464</u>	0.141	0.331	0.274	0.131	0.021	0.238	0.495
9	みんなで声を出して練習するとき	<u>0.625</u>	0.301	0.081	0.253	0.175	-0.044	0.037	0.586
19	グループで教え合いながら、練習するとき	<u>0.528</u>	0.385	0.229	0.127	0.152	-0.292	0.180	0.639
5	サッカーで思い切り身体を動かしているとき	<u>0.722</u>	0.065	0.038	0.141	0.026	0.240	-0.002	0.606
10	汗をかきながらボールを追いかけしているとき	<u>0.711</u>	0.129	0.177	0.094	0.197	-0.001	0.143	0.623
15	広いグラウンドを思い切り走り回れるとき	<u>0.741</u>	0.064	0.025	0.029	0.090	0.310	-0.147	0.682
24	雨が上がり、思い切りサッカーの練習ができるとき	<u>0.522</u>	0.030	0.276	0.250	0.259	0.143	0.138	0.519
3	みんなに「ナイス!」と言われ、誉められたとき	<u>0.180</u>	<u>0.616</u>	0.065	0.355	0.272	0.008	-0.087	0.625
8	みんなの前で見本を見せて、「すばらしい!」と誉められたとき	0.020	<u>0.739</u>	0.181	0.078	0.086	0.015	0.043	0.595
13	先生に「うまい!」と言われ、誉められたとき	0.198	<u>0.737</u>	0.084	0.135	0.212	0.235	0.137	0.728
18	先生が自分の力を認めてくれたとき	0.207	<u>0.728</u>	0.107	0.084	-0.007	0.299	0.114	0.695
16	新しい技や難しい技ができるようになったとき	0.026	0.158	<u>0.730</u>	0.138	0.103	0.244	0.023	0.649
27	練習した技が試合で使えたとき	0.173	0.000	<u>0.718</u>	0.075	0.192	0.105	-0.023	0.600
28	サッカーの技が前よりもうまくできるようになったとき	0.178	0.249	<u>0.679</u>	0.243	0.072	0.135	0.107	0.649
21	リフティングの回数など目標が達成できたとき	0.080	0.118	0.175	<u>0.713</u>	0.048	0.004	0.059	0.566
30	リフティングの回数を更に伸ばそうとするとき	0.253	0.161	0.281	<u>0.452</u>	0.051	0.095	0.252	0.449
22	練習で一生懸命がんばったことが認められたとき	0.259	0.374	0.328	<u>0.515</u>	0.096	0.173	-0.028	0.621
23	落ちこんだ時、友達が励ましてくれるとき	0.373	0.380	-0.019	<u>0.453</u>	0.058	-0.016	-0.016	0.494
26	自分が相手に抜かれても、仲間がボールを取ってくれるとき	0.315	0.050	0.053	<u>0.459</u>	0.376	-0.069	0.058	0.466
25	相手のボールが取れたとき	0.044	0.078	0.040	0.242	<u>0.729</u>	0.335	0.226	0.764
4	仲間からのパスがうまくもらえたとき	0.234	0.297	0.240	0.050	<u>0.465</u>	-0.147	-0.149	0.464
14	上手くパスが繋がったとき	0.245	0.192	0.252	-0.034	<u>0.659</u>	0.068	-0.097	0.610
1	相手をドリブルやフェイントで抜けたとき	0.270	0.385	0.345	0.157	0.069	-0.068	-0.479	0.605
2	「難しい技」を覚えようとするとき	0.343	0.046	0.365	0.270	0.145	-0.263	0.002	0.417
6	シュートして点をとったとき	0.066	0.111	0.135	<u>0.581</u>	-0.008	<u>0.486</u>	-0.241	0.668
11	強力なシュートが打てたとき	0.139	0.223	0.296	0.083	0.112	<u>0.597</u>	-0.028	0.534
12	強いチームと試合をして勝とうとするとき	0.252	0.290	0.179	0.106	0.026	-0.020	<u>0.635</u>	0.597
20	ボールを思い切りけれるとき	0.188	0.165	0.311	-0.002	0.178	<u>0.472</u>	0.181	0.448
29	試合中、すばらしいプレーをしたとき	0.171	<u>0.420</u>	<u>0.459</u>	0.328	0.028	0.371	0.058	0.668
二乗和		4.043	3.428	3.033	2.509	1.778	1.708	1.088	17.619
寄与率		13.493	11.440	10.121	8.373	5.934	5.700	3.631	58.800

これらの項目に共通する内容は、声を出したり、身体を思い切り動かすことに伴う楽しさである。そこで、この因子を「活動性」の因子と命名することにした。

第2因子は、「みんなの前で見本を見せて、『すばらしい』と誉められたとき (.739)」「先生に『うまい』と言われ、誉められたとき (.737)」「先生が自分の力を認めてくれたとき (.728)」に高い負荷量がみられた。これらの項目は、良いプレーができたり、良い見本となり他者に誉められることに関連する楽しさであると解釈されるので、この因子を「賞賛」の因子と名づけることにした。

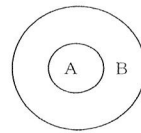
第3因子に高い負荷量がみられたのは、「新しい技や難しい技ができるようになったとき (.730)」「練習した技が試合で使えたとき (.718)」「サッカーの技が前よりもうまくできるようになったとき (.679)」である。いずれの項目も新しい技や難しい技が修得できたことなどで感じる楽しさである。そこで、この因子を「達成」の因子と名づけた。

第4因子には、「リフティングの回数など目標が達成できたとき (.713)」「リフティングの回数をさらに伸ばそうとするとき (.452)」などの項目に高い負荷量がみられた。この因子は、サッカーの技術が向上していくことに伴う楽しさであるので、「向上心」の因子と命名した。

第5因子に高い負荷量がみられたのは、「うまくパスが繋がったとき (.659)」「仲間からのパスがうまくもらえたとき (.465)」などである。これらの項目は、仲間との連携プレーに伴う楽しさである。そこで、この因子を「チームワーク」の因子と名づけた。

第6因子には、「強力なシュートが打てたとき (.597)」「シュートして点をとったとき (.486)」などの項目に高い負荷量がみられ、第7因子には、「強いチームと試合をして勝とうとするとき (.635)」の項目に高い負荷量がみられたが、項目数が少なく一義的な解釈ができなかったため、第6因子および第7因子は命名できなかった。

以上のことから、本研究においては、少年サッカーの楽しさは5因子で構成されていると考えられ、それ



A (中核): 内発的な楽しさ → 活動性, 達成, 向上心  
B (周辺): 外発的な楽しさ → 賞賛, チームワーク

図1 本研究から推察される少年サッカーの楽しさの構造

ぞれ「活動性」「賞賛」「達成」「向上心」「チームワーク」因子と命名された。

杉原 (1994) によれば、運動の楽しさの構造は、周辺に外発的な楽しさがあり、その中核に内発的な楽しさがあると示唆されている。運動の外発的な楽しさとは、他の運動でも、また運動以外の行動でも得られる楽しさであり、その主要なものとしては、親和動機、承認動機などの社会的動機が満足される楽しさがある。運動の内発的な楽しさとは、その運動でしか得られない楽しさであり、他の活動では代えられない楽しさである。そして、それは運動技能の向上や自己決定、有能さの認知による楽しさであると考えられている。

これらの考え方を、本研究で得られた少年サッカーの楽しさの5因子を当てはめてみると、周辺には、「賞賛」と「チームワーク」の楽しさがあり、その中核には、「活動性」「達成」「向上心」の楽しさが位置しているのではないかと考えられる (図1)。

## 2. 少年サッカーの楽しさと子どもの性格特性との関係

少年サッカーの楽しさ得点を求めるために、各因子において、因子負荷量0.40以上の項目を選択した。但し、他の因子と重複する項目は除外した。その結果、第1因子は8項目、第2因子は4項目、第3因子は3項目、第4因子は5項目、第5因子は3項目の合計点で求められた。その得点をもとに、少年サッカーの楽しさと子どもの性格特性との相関係数を求めた。その結果、協調性と少年サッカーの5つの楽しさの尺度得点との間に、正の有意な相関が認められた (表2)。この結果は、他者への共感や信頼を感じることができると子どもは、少年サッカーの5つの楽しさを強く感じる傾向があることを示唆している。協調性の高い子ども

表2 少年サッカーの楽しさと子どもの性格特性との相関係数

	F 1 活動性	F 2 賞 賛	F 3 達 成	F 4 向上心	F 5 チームワーク
協調性	.363***	.249***	.223***	.393***	.201**
統制性	.350***	.172**	.177**	.326***	.194**
情緒性	-.211***	.012	-.001	-.162**	-.050
開放性	-.087	-.053	-.052	-.123*	.045
外向性	.028	-.018	.084	-.020	.108*

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

もは、他者とうまく関われるため仲間やコーチと互いに好意的に接することができるであろうと考えられ、練習の中で他者から賞賛や激励の言葉をもったりして仲間との親密感が増すことで仲間意識やチームワークといった少年サッカーの外発的な楽しさを感じることができる。そして練習を継続していくうちに、技能も向上し、「達成」「向上心」など中核にある少年サッカーの内発的な楽しさを感じるまでに至ることができるのではないかと考えられる。これらの結果は、集団的スポーツとしての特徴を反映するものであった。

また、統制性と少年サッカーの5つの楽しさの尺度得点との間に、正の有意な相関が認められた。このことは、自己統制ができ責任感の強い子どもは、少年サッカーの5つの楽しさを強く感じる傾向があることを示唆している。統制性の高い子どもは、チームでの自分の役割・ポジションを積極的に遂行しようとする中で、それが得点に結びついたり仲間のアシストにつながるなど、自分や仲間を起こる様々なできごとを肯定的に捉えることができるのではないかと考えられる。

そして、情緒性と少年サッカーの楽しさ尺度の活動性および向上心との間に、相関係数は低い負の有意な相関が認められた。そのことは、緊張や不安の強い子どもは、サッカーの活動性と向上心の楽しさは感じにくい傾向を示すということである。情緒が不安定な子どもは、何事にも失敗を恐れ自信をもちにくいので、大胆な行動は避け控えめな行動をとるのではないかと考えられる。何事においても上達したり、自分の壁を乗り越えたりするには、心配ばかりしているのではなく、思い切って挑戦していくことが大切であり、そうすることによってより深い少年サッカーの楽しさに到達できるのではないかとと思われる。

### 3. サッカー好感度、練習回数、競技レベルによる少年サッカーの楽しさおよび子どもの性格特性の差異

#### (1) サッカー好感度による差異

サッカー好感度により少年サッカーの楽しさ得点および子どもの性格特性が異なるのかどうか検討を加えた。サッカー好感度について「やや好き」「好き」「大好き」の3グループに分け、それらのグループが少年サッカーの5つの楽しさ及び性格5特性において、どのような特徴を示すのかを一要因分散分析を用いて検討し、その結果を表3に示した。

少年サッカーの5つの楽しさと子どもの性格特性の「協調性」および「統制性」において、サッカー好感度の3グループ間に有意な差が認められた。そこで、どのグループ間に差があったのかをみるために、LSD法による多重比較を実施し検討した。その結果、「サッカーが大好きである」と回答している子どもは、少年サッカーの5つの楽しさを強く感じ、性格特性では、「協調性」と「統制性」が高い傾向がみられた。すなわち、少年サッカーには何種類かの楽しさがあると考えられるが、「大好きである」と思っている子どもは、サッカーの多くの場面でその楽しさを見出しているのではないかと推察される。また、サッカーは集団的スポーツであるので、人と接することが好きであり、円滑な人間関係を築くことができる子どもが、退部することもなく練習を継続していけるものと考えられる。また、円滑な人間関係を築くには、集団のルールを守ったり、自分に与えられたことを責任をもってやるのが大切であり、そのような過程を通して人間関係が深まり、信頼関係へと進展していくものと考えられ、そのことが結果として表われているのではないかとと思われる。

#### (2) 練習回数による差異

サッカー好感度の場合と同様に、「週1回」「週2か

表3 サッカー好感度別にみた少年サッカーの楽しさ得点および性格特性得点の比較

	サッカー好感度						F	多重比較	
	①やや好き		②好き		③大好き				
	M	SD	M	SD	M	SD			
楽しさ	活動性	2.69	0.59	3.14	0.41	3.54	0.33	61.98***	①<②<③
	賞賛	3.14	0.63	3.43	0.58	3.69	0.40	14.99***	①<②<③
	達成	3.43	0.52	3.64	0.46	3.89	0.23	26.99***	①<②<③
	向上心	3.04	0.34	3.37	0.39	3.59	0.33	26.75***	①<②<③
	チームワーク	3.14	0.47	3.40	0.48	3.57	0.42	10.42***	①<②<③
性格特性	協調性	17.10	3.57	19.60	2.33	19.60	2.73	7.74***	①<②,③
	統制性	14.30	2.66	16.70	2.87	17.10	2.51	10.68***	①<②,③
	情緒性	17.10	4.00	15.70	3.18	15.60	3.70	1.44	
	開放性	16.50	3.51	15.70	3.19	15.50	3.23	0.88	
	外向性	17.60	2.13	16.70	3.20	17.70	3.04	0.44	

\*\*\*p<.001 (df=2/270)

表4 練習回数別にみた少年サッカーの楽しさ得点および性格特性得点の比較

	練習回数						F	多重比較	
	①週1回		②週2～3回		③週4～7回				
	M	SD	M	SD	M	SD			
楽しさ	活動性	3.35	0.44	3.32	0.47	3.57	0.36	7.23***	①, ②<③
	賞賛	3.52	0.60	3.57	0.45	3.67	0.42	1.65	
	達成	3.74	0.44	3.81	0.32	3.85	0.28	2.07	
	向上心	3.42	0.43	3.46	0.42	3.66	0.26	7.37***	
	チームワーク	3.53	0.46	3.42	0.48	3.62	0.37	4.58	
性格特性	協調性	19.40	2.95	19.30	2.79	19.50	2.66	0.11	
	統制性	16.40	2.73	16.80	2.88	17.20	2.38	1.43	
	情緒性	15.60	3.79	16.20	3.31	15.10	3.93	2.02	
	開放性	15.50	3.17	15.70	3.15	15.40	3.52	0.22	
	外向性	17.70	2.86	17.30	3.06	17.70	3.16	0.44	

\*\*\*p<.001 (df=2/270)

表5 競技レベル別にみた少年サッカーの楽しさ得点および性格特性得点の比較

	競技レベル						F	多重比較	
	①楽しめればよい		②選手を目指す		③選手である				
	M	SD	M	SD	M	SD			
楽しさ	活動性	3.00	0.58	3.40	0.39	3.40	0.38	19.06***	①<②, ③
	賞賛	3.30	0.69	3.60	0.36	3.60	0.44	9.77***	
	達成	3.50	0.53	3.80	0.28	3.80	0.28	12.62***	
	向上心	3.10	0.52	3.50	0.35	3.50	0.33	19.48***	
	チームワーク	3.30	0.52	3.50	0.48	3.50	0.41	5.42**	
性格特性	協調性	18.40	3.31	20.00	2.34	19.50	2.76	4.75**	①<②, ③
	統制性	15.70	3.32	17.20	2.37	16.90	2.64	4.87**	
	情緒性	16.90	3.60	15.50	3.56	15.50	3.60	2.67	
	開放性	16.50	3.51	15.20	3.28	15.50	3.09	2.64	
	外向性	17.10	2.85	17.30	3.27	17.70	2.96	1.06	

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01 (df=2/270)

ら3回「週4回から7回」という練習回数の違いによる少年サッカーの楽しさ得点および子どもの性格特性の差異を明らかにするために、一要因分散分析を行い、有意差が認められたものについては、多重比較を行った(表4)。

その結果、サッカーの練習回数の多い子どもは、「活動性」と「向上心」の楽しさを強く感じていることが示唆された。「週4回から7回」の練習に参加する子どもは、運動欲求が高く、身体を動かすことにより得られる喜びを強く感じ、また練習すればするほど技能の向上を実感しているのではないかと推察される。しかし、性格特性においては、練習回数による顕著な差異は認められなかった。

(3) 競技レベルによる差異

前述の2つの場合と同様に、競技レベルにより少年サッカーの楽しさ得点と子どもの性格特性が異なるのかどうか検討を加えた。競技レベルについて「サッカーを楽しめればよい」「現在、選手を目指している」「現在、選手である」の3グループに分け、それらのグループが少年サッカーの5つの楽しさと性格5特性において、どのような特徴を示すのかを一要因分散分析を

用いて検討し、多重比較はLSD法により行った(表5)。

その結果、競技レベルの高い子どもほど5つの楽しさを強く感じていた。当初は、「賞賛」「仲間」などのサッカーの外発的な楽しさを感じ練習を続けているうちに、サッカー技能も向上し、練習や試合における手ごたえや成功体験から「達成」「向上心」などのサッカーの内発的な楽しさという奥深い楽しさを感じることができるようになっていくものと考えられる。また、性格特性では、「協調性」と「統制性」において競技レベルの差異が認められた。毎回の練習における仲間との関わりから、そしてコーチからの指導により自分の感情をうまくコントロールしたり、他者の話を聴いたり、自分の意見もうまく発言できたりできるようになり、統制性や協調性も高まっていくのであろう。

最後に、本研究で得られた結果を少年サッカーの指導に適用するならば、各監督・コーチが、少年サッカーの楽しさの構造、特にその中核となる内発的な楽しさを把握した上で、子どもたちがそれらの楽しさを体感できるような練習方法・内容を工夫していくことが

必要であろう。例えば、サッカー技術の段階的練習法を確立したり、また達成感を味あわせるような練習試合の対戦相手の選び方などを工夫することによって、子どもたちのサッカーに対するやる気や継続意欲が維持・向上できると考えられる。

また、サッカー指導においては、一斉指導と個別指導が組み入れられていると思われるが、少年サッカーの楽しさの種類やその感じ方の個人差をそれぞれの子どもの性格特性に関連して認識しておくことが、より良い指導に結びつくと考えられる。

ところで、マズローは、「生理的欲求」「安全の欲求」「所属の欲求」「承認の欲求」「自己実現の欲求」という5つの欲求が低次から高次へと移行するという欲求階層説を提唱している。また、西田・澤(1993)は、体育における学習意欲を規定する要因を分析する中で、三次的要因、二次的要因、一次的要因といった形で期待・感情モデルを提唱している。そのような観点から考えると、今後の課題としては、少年サッカーの楽しさを1次元で捉えるのではなく、「順序性・階層性」を考慮した視点で捉えていくことも必要であろう。

## 要 約

本研究では、少年サッカーの楽しさについて因子分析を手がかりにその構造を明らかにし、それらが子どもの性格特性とどのような関連性を示すのかについて、少年サッカークラブ24チーム男子273名を対象に分析することを目的とした。因子分析、相関分析および分散分析の結果、以下の知見が得られた。

- (1) 少年サッカーの楽しさは、「活動性」「賞賛」「達成」「向上心」「チームワーク」の5因子から構成され、周辺に「賞賛」と「チームワーク」を含む外発的な楽しさがあり、その中核に「活動性」「達成」「向上心」を含む内発的な楽しさが位置するのではないかと示唆された。
- (2) 少年サッカーの楽しさと子どもの性格特性との関係をみた結果、「協調性」および「統制性」の高い子どもや「情緒性」の低い子どもは、少年サッカーの5つの楽しさを強く感じる傾向がみられた。これについては、協調性および統制性の高さが必要とされる集団的スポーツであるサッカーの特徴が表われたのではないかと推察された。

- (3) サッカー好感度が高い子どもほど、また練習回数が多い子どもほど、そして競技レベルが高い子どもほど、少年サッカーの楽しさを強く感じ、協調性および統制性も高い傾向がみられた。

## 謝 辞

本調査にご理解とご協力をいただきました少年サッカークラブの皆様、厚くお礼を申し上げます。

## 引用文献

- 賀川昌明 1980 「体育授業における楽しさの要因分析—その因子構造の検討—」 徳島大学教養部紀要 (保健体育), 第13巻, 11-30.
- 賀川昌明 1982 「体育授業における楽しさの要因分析—その因子構造の検討(2)—」 徳島大学教養部紀要 (保健体育), 第15巻, 1-17.
- 賀川昌明 1984 「体育授業における楽しさの要因分析—学習者の個人特性と因子別Z得点との関係について—」 徳島大学教養部紀要 (保健体育), 第17巻, 20-32.
- 賀川昌明 1994 学校体育 9 特集「運動の楽しさの構造—運動の内発的な楽しさと指導の視点—」, 14-16.
- 伊藤豊彦, 織奥信男 1988 「体育学習における児童・生徒の楽しさを規定する要因と教師の認識」 体育学研究, 第33巻, 第2号, 123-133.
- 西田 保, 澤 淳一 1993 「体育における学習意欲を規定する要因の分析」 教育心理学研究, 第41巻, 第2号125-134.
- 西原 司, 千駄忠至 1985 「バレーボール学習の楽しさに関する研究—技能課題達成前・後の楽しさの変化—」 スポーツ心理学研究, 第12巻, 第1号, 29-32.
- 岡澤祥訓 1994 学校体育 9 特集「運動の楽しさの構造—運動の楽しさの広がりや深まり—」, 20-22.
- 曾我祥子 1999 「小学生用5因子性格検査 (FFPC) の標準化」 心理学研究, 第70巻, 第4号, 346-351.
- 杉原 隆 2000 「スポーツ心理学の世界」 福村出版, 68-117.
- 杉原 隆 1994 学校体育 9 特集「運動の楽しさの構造—心理学から見た運動の楽しさの構造—」, 10-13.
- 徳永幹雄, 橋本公雄 1980 「体育授業の運動の楽しさに関する因子分析的研究」 健康科学, Vol.2, 75-90.
- 豊田一成 1994 学校体育 9 特集「運動の楽しさの構造—サッカーの魅力を満喫させる指導の工夫—」, 29-31.
- 和田 尚 1988 スポーツの楽しさの条件「スポーツの心理学 (応用心理学講座8)」 福村出版, 56-70.
- 米川直樹 1994 学校体育 9 特集「運動の楽しさの構造—運動の外発的な楽しさと指導の視点—」, 17-19.

(2003年12月12日受付)

